

第三二回 武蔵野文学賞「高校生部門」 詩部門

選考委員…文月 悠光

新設された詩部門には二十一作の応募がありました。他の部門と違い、審査は文月一人で行っています。しかし、誰が見ても明らかな筆力や個性というものはあるわけで、そのような魅力ある作品を選ぶことができました。

最優秀賞の川上真央さんの「私が一番私になるとき」には、パワーを感じました。「逃げる」という後ろ向きな言葉を選択しながらも、ひたすらに前進していく躍動感に溢れています。

追いかけてこの勢いで「まわせまわせ／地球をまわせ」など、表現の可愛らしさとスケールの大きさを感じました。

へ逃げているとき

私は一番私になる

鳥籠から逃げるとき

小鳥は一番小鳥になる

ライオンから逃げるとき

ガゼルは一番ガゼルになる

という畳み掛けが印象的です。本作における「逃げる」は、単なる逃避ではなく、様々な期待や役割から自己を解放する手段のひとつなのです。

それとは対照的に、へ静かに静かに生きているへ穏やかな世界も描かれています。語り手と動物たちが寄り添っているような場面です。この部分は他の箇所比べて行数も多く、ゆったりと読めるように工夫されている。そうした静と動のコントラストもまた強く印象に残りました。結末部のへ未来から逃げるとき／ひとは一番ひとになるからへは、解釈が分かれる部分と思いますが、勢いのままに走り切るのではなく、「未来への恐れ」を隠さないところに、この語り手の人間味を感じました。

優秀賞の山本蒼太郎さんの「きつともう、此の儘何処にも着かない

よ」は、さまざまな過去（ありえたかもしれない可能性としての過去）を描きます。〈私は成長してしまふ〉へどうして／私は今を受け入れられているのだろう〉という戸惑いと、行き場のない後悔の気持ちをしつかりと書いています。結末の〈私は今日が人生で一番綺麗な日であって欲しかった〉という一行が非常に切実で、そのまなざしの揺らぎがこちらにも伝わってくるようで胸に響きました。

佳作の**岩崎航佑さん**「青」は、自分自身を受け入れること、そして他者から見た自分を引き受けるための作品と感じて選びました。

語り手は、自室にいるときはへまだ黄色いることができた〉とあるのですが、友人の前では「青」になってしまいます。

ただ語り手の意識、友人の語りについても、曖昧さが残されているんですね。色はその人の属性や、刷り込みに左右されるもののだと感じます。語り手はへ色を変えたいと思った〉り、「青」に順応しようとしたりするけれど、結局のところ、

へ私は青になることを避けられなかった。

青はもう私ではない気がしていたのに

私は青だった。〴〵

という言葉の通り、青はすでにおそらく「私」という存在の一部になっている。「青」から逃れたいけれど逃れられない、そのような逡巡が詩の表現において魅力的でした。作者はすでに詩誌に投稿をしているそうなので、現在の抽象的な方向性や、自分なりの逡巡を表現することを諦めずに、書き続けていった欲しいと思います。

佳作の**兼子玲さん**「終わり」。卒業式の日の一場面と思いますが、へ終わりはいつもあつけなく／ただ呆然と過ぎてゆく〉とあるとおり、学校生活の終了に呆然としている心境がよく伝わってきました。見慣れた景色への気づきもあり、よくまとまっている一方で、最後は予定調和的というか、行儀が良すぎるように感じました。へ立派になってもっと多くの花を頂けがいい〉とあるのですが、他人から贈られる花よりも、自分の内側にあるもので締めくくれると、より力強さが出るはずです。

佳作の**平木孝典さん**「脱同調」も印象的でした。各所に太字の部分があるのは意図的な調整でしょうか。へ七色は何を連想させるか〴〵

という問いから展開していくのですが、思考の流れや疑問が自然な流れで書かれています。周りを気にしてしまったり、空気を読んで考えを合わせてしまったり、学生も大人も共感できる内容です。ただ「虹のようにまとまって綺麗になろう」としてしまいう自分自身」をもっと深く見つめてほしいと感じました。終わりの「自由って何だろう」も大事な問いかけですが、人によって違うという曖昧な結論になってしまっています。ここがとても惜しい。最後の一行までもっと粘り強く書けるようになる、より良いですね。

応募作全てに言えることですが、詩においては、誰もが正しいと思う答えを書く必要はないのです。むしろ書いている人の偏りや、思い込みで押し切った方が魅力的になります。どうしたら作品が面白くなるか。創作を通して自己を探究してください。